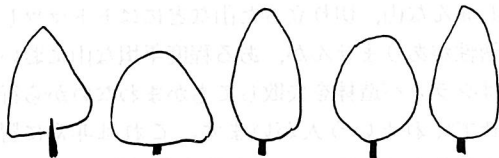


聞く人 北海道立林産試験場
副場長 古田 昭司
留萌林務署
署 長 盛 功
留萌支庁林務課
課 長 村上 晴芳



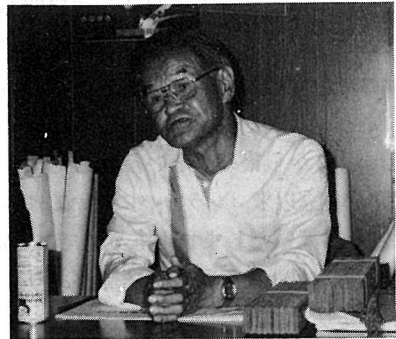
低付加価値広葉樹の有効利用がとみに叫ばれています。遠別初山別森林組合では、シラカバを主な原料として、つまようじ用単板とチップを生産しており、有効利用を身を持って実践しています。そこで、組合の常務理事をされている広瀬さんをお伺いし、おおいに語っていただきました。なお、古田氏に進行をお願いしました。〔編集子〕

古田：今日は遠別初山別森林組合の経営するつまようじ用単板工場、チップ工場を見学させていただきましたが、それを通して、低付加価値広葉樹材の有効利用とそれをさかのぼった森林施業の在り方に至るまで、広瀬さんの屈託のない御意見を聞かせたいと思います。

遠別・初山別林業の概要

広瀬：私どもの組合は遠別と初山別の2カ町村にわたるもので、地区内には75500haほどの山林面積があります。そのうち18900haが私有林、ぞくに言う組合加入可能面積で、その他に公有林として道有林が2600ha、これは初山別にございます。それから遠別町、初山別村の所有する森林が1800haで、公有林は合わせて4400haにございます。国

広瀬盛夫さんに 森林組合の経営を聞く



遠別初山別森林組合常務理事
(兼 道森連常務理事)

広瀬 盛夫さん

有林が52200haにございますので、全体で75500haぐらいの面積になっているわけです。そのうち組合に入っている面積は11800haで、町村有林の全面積1800haも合わせた13600haを基盤にする森林組合だと言えます。

そのような背景の中で私どもの組合の事業量を申し上げますと、年商がだいたい8億円にございます。このうちチップ工場は、若干のずれがございますが、年に16000~18000m³の生産を行っています。それから単板工場につきましては、原木消費量で年に2200m³、これはシラカバー一本で行っています。販売価格で申し上げますと、チップの場合は2億7000万円程度、単板につきましては1億4400万円程度ですから、両者合わせて4億円が木材工業部門での売り上げにございます。その他に造林を、平均しますと一年にだいたい300ha行っています。それから撫育ということですが、ここではなかなか採算が合わないで間伐は行っておりません。もっぱら下刈り一本といっても過言ではありません。これが年間2500ha程度です。また直営苗畑を3ha程度もっておりまして、年間20万本ぐらいの苗木生産を行っています。

木材加工部門についての材の手当状態を申しま

すと、国有林から、チップ用については立木で1カ月分、それから素材による払い下げが半月分、合わせて2000m³程度いただいています。シラカバにつきましては、半月分100m³程度を国有林からいただいています。あとはすべて民間からの買い入れということになっています。パルプ材については運賃を考えると、あまり遠くから持ってこれないということで、工場を中心にしてほしい80km以内から集めるという状態です。昭和47年度の工場創立以来、シラカバについては年に2000m³程度、通算いたしますともうすでに25000m³を「食いつぶした」と言えば語弊がありますが、消費したわけです。この工場をつくりましたところには、地元から80%の原料供給ができたものです。現在では、単一樹種であるということから地元40%、遠くは南で小平町周辺、北では浜頓別、中川町から60%の原料供給を受けています。しかしながら、遠隔地から材を求めているということで、年々材質が低下してきていることに悩んでおります。

工場の中において特筆されるものを二点申しますと、まず皮をむく機械、これは私のところが日本第1号機なのです。今では非常にスマートになりまして全道で100台以上普及し、わりばし工場、つまようじ工場で使っていない所はありません。あれは私どものものが、記念すべき第1号機でございます。それともう一点、工場ではオイルを一滴も使っておりません。47年当時あの工場はオートメーション化したA重油消費工場、夏場で月に12000ℓ、冬場で20000ℓ、合計すると年に200000ℓ程度使っておりました。47年当時でA重油の価格は15円/ℓでしたが、52年になりますと35円/ℓです。このような変化に対応して、あのチップ工場を52年度に第2次林業構造改善事業で建てさせていただいたわけですから。といいますのは、旧工場では皮などを単にすべて燃焼しておりましたが、それらを粉砕しボイラーの燃料にしようという発想からオイルを一滴も使わない工場を建設したのです。これも北海道で一番最初です。この廃材燃料で煮沸も乾燥も行っています。たいいてい煮

沸は木クズ燃料ですが、乾燥はわりばし工場にしても、オイルを使っている例が多いと思います。A重油は現在75円/ℓはしており、年に200000ℓ消費するとして1,500万円です。ところが廃材ボイラーに変えますと、確かに人間が2人必要ですが、退職金などを含めて年に1人400万円、2人でも800万円で済むわけです。というふうにあの工場には2つの特色があるのです。

産業木としてのシラカバは、その存在価値がますます高まってきています。ここ4、5年私どもの山林には、よし悪しは別として、トドマツからシラカバへの移行が急速に進んで来ています。急しゅんな山、切り立った山などにはトドマツしか適性がありませんが、ある程度平坦な山においてはシラカバ造林を失敗してもかまわないから行わせてくれという人がいます。これは非常に冒険的なことですが、一つの意識改革の芽ばえとして、植える人の心を尊重した造林こそが、造林推進のかなめと考えます。

多少わき道にそれる部分もありましたが、以上が遠別・初山別林業の概要です。

つまようじ工場経営から

林産工業への提言

古田：シラカバのつまようじ工場についてもう少し詳しくお聞かせ下さい。

広瀬：私どもがつまようじ工場を始めたのは昭和47年4月1日ですが、創業するに当たって悩んだ判断材料は、つまようじはいろいろなプラスチックに取って変わられる危険性がないかということです。それで電話やその他の方法で、その危ぐを聞いてみましたところ、つまようじの生命は何かということに気づいたのです。それはただ一言で片づいたのですが、歯の合わせ目に入る繊細な細さなのです。それに気づいてみると、プラスチックではそこまでの細さを求められるか疑問です。金属ならば可能なことですが、金属を口に入れるような人はいません。針のようなものなのですから。それにプラスチックは熱に弱いのが多いので、製作過程での切削、研磨の際に熱を持ち当然曲がってしまうわけです。これで私の悩みは全く解決

したのです。こう申し上げると本当に簡単なことですが、ずいぶん悩みました。

つまようじの原料である丸太は容積で取り引きされますが、単板になると面積で取り引きされます。また単板からつくられた丸軸（直径2mm、長さ36.5cm）は、一本何円では売りようがないので重量で売買されます。この辺が微妙なところです。私どもでは単板ではしかたがないので、丸軸にまで加工すべく、50年度からやろうと決断したのです。しかし丸軸にするためには特殊な技術が必要で、そのために技術者を呼んで給料を保障するとなると、今の倍の単板を生産しなければなりません。また丸軸からつまようじを作る、すなわち目立て、研磨の技術ですが、これは北海道ではなかなか得られません。現在遠軽に一工場が残っていますが、北海道人でこの目立て、研磨のできる人はいません。すべて本州からの技術輸入です。ということで、そういうような繊細な技術というものは、なかなか北海道には根づかないのだなという感じがします。北海道は残念ながらまだ素材産業と言うことで、完成品を作るとなるとこの点においても弱い部分があります。熟練工の養成というものが先行してきませんと、手工業に近い分野での本州との格差はなかなか解消できない気が致します。

先ほどつまようじが取り引き過程において、単位が変わると申しましたが、これは重要なことです。私は自分の経験から、木材加工というものは、「呼称」の変わる範囲で物を持たなければダメだと思っただけです。このことは木材の哲学のような気がします。製材屋さんがもうからないのは、私からみれば当たり前のような気がします。容積で買って容積で売っているのですから。これではもうかりません。相手に原価がみえみえなのです。銘木などは別として、少くともトドマツなどは1等材か2等材ですから、原価を割り出されてしまうわけです。歩止まりも加工費もそうです。そうすると、もうかるのは相場のあや以外ではあり得ません。その点でつまようじは、目先きを変えられる強さがあります。呼称や取り引き単位が全く

変わるわけですから。北海道の加工業においては、そういうふう呼称や単位を変換していく工夫が必要で

現在の間伐技術について

古田：つぎに森林施業について、お考えを聞かせて下さい。

広瀬：留萌管内にはカラマツがあまりなく、針葉樹としましては大部分がトドマツでございますが、このトドマツについて一言述べたいと思います。私の経験から申しますと、このトドマツの問題はカラマツ以上の困難性を伴うと思います。というのは、生育地帯が両者では全く違っているからです。カラマツというのは丘に生育している木です。今私どものトドマツは、非常に急しゅんな山に生育しています。こんな所にある木はすべてなげです。今の価格構成では、持ってきても採算のとれるものではない。私はここに最大懸念を持つのです。カラマツはご存知のように丘に生育しています。そして、補助金をつけてくれるからまにあっているのです。トドマツも条件が同じ場所なら、私はカラマツと勝負できると思います。両者の生育地帯の条件が、お天とうさんと番頭さんほどの違いなのです。一方が10,000円で出る所を、一方は15,000円かかります。私はここに恐ろしさを感じます。と同時に間伐技術の開発を強く求めます。私は今の間伐技術には技術がないと思います。育林技術しかないんです。どうやったら良い林ができるのか、ということのみで間伐を行っているのです。これはバカな話です。今は、価値を求めてはじめて間伐なのです。私は採算が取れる間伐方法が開発されるならば、良木生産は一步後退しても良いと考えています。

それと私は、林木生産を量的生産地帯と間伐促進地帯とに分けるべきと考えます。地利、地位条件によって、間伐を繰り返すべき林分と、粗雑な間伐で量産を求める林分に分けていかなければなりません。すべてが希少価値のある良いものばかりですと、これはもう良いものではありません。これは物の摂理です。すべてが良い山をつくらうとして画一的なものばかりができてきたら、世の

中に良いものはないのです。悪いものもあるから良いものもあるのです。ですから、間伐促進地帯と量的生産地帯を明確にした間伐施業が必要で、間伐なくして良い木はできないというのは、過度な宣伝だと思います。

広葉樹の育林について

古田：今度は、広瀬さんに道森連の常務理事として、林家の方々にとどのような夢をもたらすよう組合運営をされているのか、育林部門についてお話しいただきたいと思います。

広瀬：本音を申し上げれば無策です。山というものはせつな的に考えるものではない、というようなお釈迦様の説法しか申し上げられません。カラマツ地帯では、どん底からは上がるようなやり易さがありますが、私どもの方は逆を行ったわけです。雑木を取り払ってトドマツをつくって、必ず良い目に合いますよという更新方法をとってきた。そして今になってトドマツが見れるようになってきた時、こんな木はいらない木だ、というはざまにはまりこんだわけです。ここに一番の苦悩があります。したがって、そのような背景の中で山というものは短絡的に語るものではない、なげいていてもしようがないだろう、植えておきましょう、かわいがっておきましょうというのが、私どもの偽らざる気持です。

古田：伐採と造林は一緒にやられているということですが、伐採はどのような方法で行っているのですか。

広瀬：雑木の場合は、12cm以上は切らしています。問題は2次林ですが、皆伐方式でないと2次林から木代金はできません。私どもの経験ですと、ha当たり200石(55m³)の材が出ないと山は赤字になります。

古田：ナラ、マカバ、タモなどの優良広葉樹を切ってトドマツを植え、50年、60年先を期待するよりも、そういう木を残して、その下にトドマツを植えるというような、両方が立つような施業方法は無いものですか。

広瀬：そうしないと採算がとれません。私どもが現在やっている造材の費用が9,000円/m³です。

パルプ材にしますと11,000円/m³ですので、2,000円しか手元に残りません。これでは木を切るという人はいません。ここに悩みがあるわけです。組合維持のための山林伐採かという論議がでてくるわけです。

古田：皆伐以外に採算の取れる方法がないということですが、広葉樹を残しながら森林施業を行う方法がないものかという気がします。広葉樹がボーナス、針葉樹が月給という考え方があります。これは針葉樹で毎月の月給を稼ぎ、広葉樹でいざという時のボーナスを稼ぐものです。そういうような考え方で、今までのように一つの樹種で一年分の給料を稼ぐような量的生産指向ではなく、価値生産指向で行けば、お互いが両立できる施業方法が可能になってくると思います。署長さん、いかがですか。

盛：留萌管内では、国有林にはまだまだ良い木が残っていますが、里山はほとんど疲弊して、良い木はありません。そのような中でこの管内では林産工業があまり育っていません。それは何故かと言いますと、留萌市を中心にして考えた場合、国有林から良い木は出るのでありますが地元資本の核になる工場がないのです。来年度あたりから間伐材が徐々に出てきますが、林産工業が発達していないために、小径材加工工場が全くないわけです。この工場は今日始めて見学させていただいたのですが、このような工場を核として多品目生産の加工工場をみんなで協力して育てていかなければならない気がしています。

古田：林務課長さん、最後に一言お願いします。

村上：一つ申し上げたいことは、これからこの管内ではトドマツを中心に間伐材が出てきますが、森林組合を基盤として、間伐材の有効利用を促進していかなければならないということです。

古田：本日は、広瀬常務をはじめ皆さんから林業、林産業について素晴らしい御意見を聞かせていただき、ありがとうございました。

(文責 板垣博一)